

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(44) 平成14年4月1日

明治初期の教科書(その4)

平山陳平編輯『静岡縣誌』(S290/243)

『静岡縣誌』(全1巻 師範学校蔵版 明治10年刊)は府県地理書のひとつで、小學校生徒が学校近隣の郷土地誌を学習できるように、体系的に内容を整理して編集刊行されたものです。奥付けに「編輯人 平山陳平 静岡西草深町百五番地住」と書かれ、また定価金七錢とあり、発行元は呉服町の大森弘三郎となっています。

明治12年に改訂出版された『改正静岡縣誌』(全1巻 S290/43)は、頁数も29頁となり『静岡縣誌』の42頁に比べ、内容も省略され、付録「静岡縣之縮圖」5頁もありません。また定価も5錢となっています。

編集者の平山陳平は天保10(1839)年、甲斐国(現山梨県)甲府の幕臣、加藤進左衛門の六男に生まれ、維新後駿河に移住、平山省齋の門に入りその養子となりました。明治8(1875)年提督社に入り「静岡新聞」の編集長や「重新静岡新聞」の局長を務め、明治12年参同社(のち函右日報社)から「函右日報」を創刊するなど、県下の民権派ジャーナリズムの中核として幅広く活躍しました。明治14年の静岡県改進黨結成の際には兄磯辺物外とともに中心になり、同党常議員になりました。明治17年上京して警視庁御用係となり、明治22(1889)年死亡時は警視庁記録課長でした。彼の著書には『静岡縣誌』のほか『駿河風土記』(S220/15)があります。

「静岡縣廳八、東海道駿河國安倍郡、静岡ニアリ、北緯三十四度五十八分三十秒、西經一度二十五分、東京ヲ距ル、四十六里十三町五十九間三尺、駿河、遠江、伊豆三州二十三郡ヲ管ス」本書は上記のように始めに県庁を掲げ、その管轄区域を明らかにし、それを「12大区」の行政区に分けていることを述べています。また各12の大区について、その地域と町村およびその下にある小区をあげています。次いで駿河国、遠江国、伊豆国と7つの島嶼の特徴について体系的に記述しています。

駿河国を例にとると「東八伊豆、西八遠江、北八甲信、南八海二面ス(中略)氣候八極暑九十八九度(摂氏36-7度)、極寒四十度(摂氏4度)、幅員、東西十八里、南北十二里、今ノ静岡八、古ノ国府ナリシト謂フ」(括弧内は執筆者による)とあるように、地域の概観と気候、その国の歴史の概略を述べています。因みに宿駅12、戸数75,390、人口382,814となっています。次に学校・名邑・湾港・神社・山岳・河川・滝・温泉・物産をあげ、特に物産については郡別に列挙し地域の特徴を示すなど、それぞれの地域ごとに利用できるように編集されています。

静岡の成立の箇所は「(藩領の駿河国を)更ニ徳川家達ニ賜ヒ、府中ヲ改稱シテ、静岡ト謂フ、爾後、藩鎮ト為リ、明治九年ニ至リ伊豆、遠江ノ二州ヲ併セテ、之を管ス」とあります。明治2年6月新政府の命により、駿河府中(駿河)の名称を変更することになり、駿府藩は静岡藩・静岡城・静岡の三つの候補のうち静岡を選び、藩名も静岡藩に改称しました。なお静岡という名称は賤機山に因み「賤ヶ丘」と改称したところ、府中学問所頭の向山黄村は「賤」が賤しいに通じるため、静岡の二字に修整提案したものです。

本書は各国の地誌を概観した後に、その国の歴史を述べ土地の沿革や日本史の全体の結びつきを明らかにするなど、当時の地方誌のスタイルをとっていますが、歴史的背景についての叙述は明確であり、挿絵も簡明で分かりやすく生徒の学習に適するよう、うまく工夫された教科書と言えます。巻末には附録として、各地の名産などを列記した、総ルビ付の「地名人名産物字類」と静岡県地図の「静岡縣二州二十三郡二十二驛之縮圖」があります。

【参考文献】

『日本教科書大系 近代編 第15巻 地理』(375.9/118)